

円の森のハブと子守唄

龍郷町立円小学校 五年 酒井 亮太郎

ゴーゴー。

ガタガタガタ。

外はものすごい台風が吹き荒れている。ぼくとりなが、かあさんの仕事の関係で円集落に越してきて、初めて迎える大型台風だ。

「りようたるう、大変。げん関のすき間から風が吹き込んでくる。」

最近、りなは、兄であるぼくのことを「りようたるう」と呼びすてにする。どうやら、ライダーの主人公が「りようたるう」というらしい。おそらく、そのまねにちがいない。

「えっ、どこから。」

げん関に行ってみると、雨戸を入れてあった戸袋とげん関の間に、五センチものすき間ができています。そこから、雨風に混じって木の葉や小枝がまい込んでくるのだ。

「何かでふさがなきゃ。・・・ダンボール持ってくるよ。」

と、おくにもどろうとしたときだ。ふわっと、何かが

五センチのすき間から、まい込んできた。

「りようたるう、アサギマダラだ。」

確かに、りなのてのひらでじっとしているのは、アサギマダラだ。

「あれっ、みんなと旅に行き損なつたのかな。それとも、リュウキュウアサギマダラかな。」

ぼくは、習いたての知識を、りなに見せびらかした。

「りようたるう、何言ってるの。ほら、ちゃんとマーキングされてるよ。きつと、旅に出られなかったのかもね。」

りなが言うので、マークを見てみた。

「どれ、君はどこから来たのかい。円集落へようこそ。」

なに、なに、『ネリヤカナヤ』。えっ、君はネリヤカナヤから来たのかい。」

「そんなばかなことあるわけないでしょう。ネリヤカナヤは海の王国よ。海の中にとちよが旅するわけないでしょう。」

ぼくとりなは、昨年、ネリヤカナヤの海の王国へ連れて行ってもらったのである。（そのことが知りたい人は、「りなとまほうのたまご」を読んでください。）

「たしかに、じゃあ、このマーキングは、ただのもようかな。」

すると、アサギマダラがとつ然話し始めた。

「はい。これは、もようです。わたしは、『森のネリヤカナヤ』から来ました。りょうとうさんとりなさんに、お話がしたくて、やって来ました。人につかまらぬようと、この台風の日を待っていたので、旅に出るのがおくれたのです。」

「『森のネリヤカナヤ』って、森にもネリヤカナヤの王国があるのかい。」

「はい。けれども、わたしたちの国には、王様はおりません。海のネリヤカナヤが海を守っているのを知り、わたしたちも森を守りたくて、自分たちでつくったのです。」

「ちようちよがかい。」

「いえ、ちようだけではありません。森に住む大勢の仲間達でつくりました。」

「へええ、すてきなことだね。で、ぼくたちに何を話したいのかい。」

「りょうとうさん、りなさんは、ハブのことをどう思いますか。」

「えっ、ハブかい。そうだなあ。できれば会いたくないよな。」

「うん。こわいよね。どくをもってるんでしょう。」

「はい。そうなんです、ハブだって人間がこわいのです。できれば、会いたくないのです。でも・・・。」

「でも、なんだい。」

「森が、道路や住宅をつくるために次々とこわされ、わたしたち森の生きものたちは、住みかを追われたのです。おとなしい動物たちは、じっとがまんしますが、気のあらいハブだけは、わざと人間の目につくところへ行き、人間をおどしているのです。『森をあらすな。』と・・・でも、人間は・・・。」

「ハブのメッセージに気づいていない。そういうことですね。」

「そうなんです。それどころか、ハブがりのために、ますます森の木々や草花たちは、切り取られてしまっているのです。」

「そうか。そんなことになっているとは・・・。」

「お願いです。ハブを止めてください。八月十三日の新月の夜に。」

「止めるって言ったって。どうやって。」

「そうよ。残念だけど、りょうとうは、運動が苦手なの。ハブとたたかうなんて、とうてい無理よ。」

「いいえ。たたかわなくたっていいんです。彼らの話に耳を貸していただけで。」

「えっ、それだけでいいの。」

「それが一番なんです。彼らは、自分たちのことを人間に知ってもらいたいだけなんです。分かってもら

「ただいだけなんです。そして、これ以上森をこわさないでほしいだけです。そして、それは、わたしたち森のネリヤカナヤ王国みんなの願いなんです。」
「うん。ぼくにどれだけのことができるか分からないけど、やってみるよ。」

「ありがとうございます。それでは、わたしは森のみんなが心配して待っているのです、これで帰ります。」
「まだ、ものすごい風よ。台風が通り過ぎるまで待たば。もう少し、りなとお話ししましょうよ。」

「ありがとうございます。でも、森のみんなに少しでも早く、知らせたいので。」

「分かったわ。気をつけてね。」

「はい。それでは、新月の夜、円小学校のデイゴの木の下でお待ちしております。」

「さあ、りな、大変なことになったぞ。ハブとどうやって話し合う。」

「りようたるうにまかせたわ。」

「えっ、いっしょに話し合おうよ。」

「話すのはりようたるうの方が得意でしょ。わたしは、
・・・そうね、オカリナでミュージックをえんそうしてあげる。やさしい気持ちで話せるように。」
「よし。たのんだぞ。りな。」

「まかせて。」

それからぼくは、大忙しだった。奄美の自然を守るために働いている人びとに連絡をとり、少しずつ自然が元にもどってきていることを教えてもらったり、奄美を世界遺産として残すために、子どもたちが取り組んでいることを調べたりした。しかし、まだ足りない。ハブを説得するには、まだ何か足りない。しかし、もう時間がない。ぼくは、自信がなかったが、精いっぱいやるしかない、そう思って、八月十三日、新月の夜を迎えた。

円小学校に着くと、校門の前で、イシカワガエルと会った。

「わあ、きれい。イシカワガエルさんこんばんは。」

りなが、声をかけると、イシカワガエルが、

「りようたるうさん、りなさん、ハブがデイゴの木の下でお待ちかねです。どうか、よろしくお話しします。」

と言った。

「まあ、あなたも話ができるのね。・・・ハブがいるのよ、早くお帰り。」

「だいじょうぶです。お腹がすいたときしか、食べたりはしませんから・・・。」

「そうなんだ。・・・お出迎えありがとう。お礼に、オカリナで『奄美の子守唄』をえんそうするわ。聞いてね。」

りなはそう言うと、覚えてたの『奄美の子守唄』をオカリナでふいた。シーンとした空気が、あたたかくなってきた。なんだか、元気がでてきた。

デイゴの木の下に行くと、辺りはいつそうシーンとしていた。いっしゅん冷たい風が吹いて、体がごこえそうになった。そのとき、

「よく来たな。りようたろう。おまえ、おれがこわくないのか。」

ハブだ。

「正直言つて、こわいです。でも、お願いしたいことがあって来ました。ハブさん、人間をおそうのはやめてください。」

「ふん、ハブが人間をおそつて何が悪い。どうせおれらはきらわれ者だ。きらわれ者は、きらわれ者らしく、森のみんなのために、人間をおそつのが一番だ。」

「いいえ、ちがいます。人間をおそえば、人間はその分森をこわします。人間は、自分たちの生活を守るために、また森を切り開くでしょう。そうなれば、ハブさんだけでなく、他の仲間達も、すみかがなく

なってしまう。」

「では、どうしろと言うのだ。このままだまっているわけにはいかないのだ。」

「人間だって、反省します。今、森を元の姿にもどそうと取り組んでいる人たちがたくさんいます。また、新たな開発を見直そうという声も上がっています。信じてください。ぼくたちのことを。」

「悪いが、おれたちハブは、昔っから人間が大きらいでね。そうかん単に信じるわけにはいかないのさ。」

「そんなあ。」

そのとき、

「ねんねんよ　ねんねんよ

なくないよ　ぼうやよ

なくないよ　なくないよ」

「『奄美の子守唄』だ。」

ふり返ると、いつの間にかりなが後ろに立ってオカリナをふいていた。そして、その後ろでは、森の動物たちちが、いっしよになって歌を歌っていた。

「おまえら、全員、くわりたいのか。」

ハブがキバをむいた。そのとき、

「待て。待つのだ。」

「長老。」

ハブの群のおくから、年老いたハブが一匹現れた。

「その女の子よ。その歌はだれに教わった。」

「じいちゃんよ。」

「そのじいの名はなんと言う。」

「ヒロヨシよ。」

「何。ヒロヨシ。そうか、あのヒロヨシか。」

「えっ、じいちゃんのこと知ってるの。」

「昔、わたしは、大学の研究室に飼われておったのだ。」

「ハブの生態を調べるといふ目的でな。研究の時以外は、せまい箱の中で、ただ死を待つばかりだった。」

「そこへ、ある日、一人の若者がアルバイトにやってきた。その男は、何を思ったのか、やがて殺されてしまわれわれハブを、ときおり、広い場所に放し、しばらくの間、自由にさせてくれたのだ。やがて、研究も終わり、いよいよ、というときに、その男が、山おくにわれわれを放してくれたのだ。だから、彼は命の恩人じゃ。その男の名が、ヒロヨシだ。君たちは、その孫になるんだね。」

「はい。じいちゃんは、今も元気でくらしています。中学校で理科を教え、生きものの不思議や命の大切さを、子どもたちに伝えてきたのだそうです。」

「そうか。・・・よし、人間をおそう計画は中止しよう。」

「しかし、長老。」

「今一度、人間を信じてみよう。もうこれ以上、森をこわすことなどしてくれるなよ。」

「はい。ぼくが、人間に伝えます。きつときつと、伝えていきます。」

「君の名は。」

「りようたるうです。」

「わたしは、りなよ。」

「そうか、では、りなさん、もう一度、『奄美の子守唄』を聞かせておくれ。」

「ねんねんよ　ねんねんよ
なくないよ　ぼうややよ

なくないよ　なくないよ」

「りなのオカリナの音に送られながら、ハブは森のおくへと消えていった。ふり向くと、他の動物たちもいなくなっていた。」

「さあ、りな、うちへ帰ろう。お母さんがそろそろ気づくぞ。」

「うん。見つかったら、ハブよりこわいよね、きつと。」

「当然さ。」
「ぼくたちは、やみのむこうでほほえんでいる新月に見送られながら、家に帰った。」

ぼくたちの祖父が、その昔、「ハブの散歩」の
アルバイトをしていたという話を聞いて、このお
話を思いつきました。ハブと上手につきあえるよ
うにしていきたいです。